

地質63 かご博蔵出し展・イチ推し標本

地質担当 若松 斉昭

本館では、令和7年9月27日（土）から11月24日（月）まで企画展「かご博蔵出し展～私たちのイチ推し、お見せします～」を開催しています。今回の自然だよりでは、地質分野からのイチ推し標本と、その背景について御紹介します。

博物館の始まり

日本の博物館の始まりは、1872年（明治5年）、ウィーン万博への出品準備として開かれた湯島聖堂博覧会とされ、これが東京国立博物館の創立とされています。この博覧会の開催に尽力したのは、日本博物館の父と呼ばれる田中芳男と、鹿児島出身の町田久成です。町田は、幕末に薩摩藩遣英使節団としてイギリスにわたり、博物館の重要性を感じます。田中とともに和製漢語の「博物館」という言葉を広め、国立博物館の初代館長を務めました。自然史系の博物館としては、国立科学博物館が1877年（明治10年）に教育博物館として設置されたのが始まりです。鹿児島県立博物館は、1915年（大正4年）8月に県立図書館内の郷土博物室として設置されたのが始まりで、地方の公立博物館としてはかなり古いといえます。鹿児島には町田久成の想いが伝わっていたのではないのでしょうか。

本館設立のきっかけ

前述のように、本館の設立は大正4年です。ではなぜこの年に博物館が設立されることとなったのでしょうか。それは、その前の年、大正3年の出来事がきっかけとなっています。

1914年（大正3年）1月12日午前10時頃、桜島が大爆発し、噴煙は約18,000mにまで上がりました。同じ日の夕方に発生した地震と合わせると、58名が死亡する大災害となりました。また、東西山腹の火口から流出した溶岩は、西側では烏島を飲み込み、東側では海峡を埋めて大隅半島と陸続きになりました。この時の噴火は、日本における20世紀以降最大の噴火とされ、日常私たちが目にする桜島南岳の噴火と比べると、噴出物の量は約1万倍にも達します。この大噴火の記録を後世に伝えるため、博物館の設立が決まりました。

噴火直後の標本

桜島大正噴火の直後に調査を行ったのが、当時鹿児島女子師範学校の教師だった、山口鎌次氏（1887-1970、後に島根大学教授、立正大学名誉教授）です。本館には、安永溶岩など大正噴火に関連する標本以外にも含め、同氏が採集した標本103点が収蔵さ

れています。今回の企画展では、そのうち2点を展示しています。



大正溶岩（西側）
1914年3月7日
山口鎌次氏採集

大正噴火を記録した写真

本館には、桜島大正大噴火を記録したモノクロ写真が271点所蔵されています。原版は耐火金庫で厳重に保管されており、デジタルデータ化されたものが、研究用や教育用として活用されています。これらの写真も、二次資料という当時の様子を後世に伝えるための大切な資料です。



一月拾貳日午前拾壹時

今回の企画展「かご博蔵出し展～私たちのイチ推しお見せします～」では、地質分野のほかに、植物・動物・昆虫・天文の各分野イチ推しの標本を展示しています。ぜひご来場ください。